



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

Vol.6

ベトナム・サイゴンの 建築と都市の文化

リー ヨンイル
李暎一

(一般社団法人 アジア建築集合体 会長)

INTRODUCTION

山家京子(神奈川大学工学部建築学科教授)

山家 今日はアジア研究センターの「アジアの社会遺産と地域再生手法」という共同研究グループメンバーの一人でもある重村先生からのご紹介で、ベトナム・サイゴンにいらっしゃる李暎一^{リー・ヨンイル}先生にご講演いただきます。李暎一先生は一般社団法人アジア建築集体会の会長でいらっしゃいます。自己紹介のスライドをご用意いただいているということですので、早速、李先生にマイクをお渡ししたいと思います。

本日は「ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化」がテーマです。前回はハノイでしたから、この夏はベトナムサマーですね。サイゴンのお話を伺うのを楽しみにしています。それでは李先生、よろしくお願ひします。

李 ありがとうございます。

それでは簡単に自己紹介をしたいと思います。私は韓国の弘益大学を卒業してから来日して、神戸大学の重村先生にお世話になり、修士と博士課程を修了しました。その後、宝塚造形芸術大学の教授や神戸大学、神戸芸術工科大学の非常勤講師など設計教育をしながら、同時に設計事務所を設立し、設計活動も行ってきました。

それから設計教育の一環として、「建築新人戦」という学生の設計コンテストを仲間たちと主催して、2016年に5人で日本建築学会の教育賞を受賞しました。

現在は、先ほど山家先生のご紹介にありましたように、「一般社団法人アジア建築集体会」の会長をしています。「アジア建築集体会」は、アジア16ヶ国の大学の先生がメンバーとなって組織された国際的かつ専門的な建築集団です。「アジアの時代」に、私たちは何をすべきか、何が出来るか、何を求めるかについて長年、仲間たちと議論して準備してきた構想をもとにつくりました。実際、毎年、各国を巡りながら開催している「アジア建築新人戦」を通じて、アジア16カ国の大学の先生がそれぞれの国のゼネラルマネージャーになって、建築の教育と設計活動を一緒にしています。

ここで少し重村先生との関係をお話したいと思います。私は韓国の大学を卒業した後、どこに留学しようか迷っているときに、韓国の大学の先生に紹介していただき、神戸大学の重村先生に会いに行きました。重村先生は、プロフェッサー・アーキテクトで、建築の教育も設計も活発にされていました。私はこれに非常に感銘を受けまして、自分自身もそうなろうと思いました。そのときの思いの続きで、私も今建築の教育と設計に携っています。

設計活動としては、個人としての活動もしていますが、2010年頃、関西にいるプロフェッサー・アーキテクトたちに声をかけ、アジアをテーマにして何か面白いことをやりましょうということで、「KANSAI 6」という組織をつくりました。一緒にアジアを巡りながら展覧会や講演会をしたり、一緒にプロジェクトを立ち上げて設計をしたりもしました。メンバーは竹山聖さん、米田明さん、長坂大さん、遠藤秀平さん、宮本佳明さんと私の6人です。最初の活動は、アジア的なコンセプトから考えた擬声、擬態語のオノマトペの中から自分の作品を説明できるものを1つずつ選んで「ONOMATOPOEIA」という展覧会を大阪のギャラリーで開催しました[図1]。

大阪に続いて、今度は韓国に行って、^{キムスグン}金壽根さんがつくった「空間」というギャラリーで、「ONOMATOPOEIA」の展覧会を開催し、「空間」という雑誌にも掲載していただきました[図2]。次に、中国の清華大学で講演会、北京のギャラリーで展示会を予定していましたが、尖閣諸島をめぐる日中間の関係悪化によって、全ての行事がキャンセルされました。

「ONOMATOPOEIA」に続いて、一緒に何かプロジェクトを一つ

LECTURER



李暎一

(一般社団法人 アジア建築集体会 会長)

弘益大学校建築学科卒業(韓国)。神戸大学大学院修士課程修了。神戸大学大学院博士課程修了(学術博士)。宝塚造形芸術大学教授。神戸大学・神戸芸術工科大学非常勤講師。アトリエビコーズリー代表。グエンタッタイン大学学科長(ベトナム)。ホーチミン市建築大学・トンドックタイン大学非常勤講師(ベトナム)。日本建築学会教育賞(2016年)、文部大臣表彰科学技術賞(2017年) 受賞。

やりましょうということで、伊丹空港を取り上げてこれからの空港の再利用を考えることにしました。これもアジア的なコンセプトですが、竹山さんが「脈脈都市」というお題を出して、みんながそれぞれ「脈脈」を建築に翻訳してつくった作品を一つに合わせて、展示会と講演会をやりました[図3]。アジアを巡回することも考えて、アジア文化の屏風にみんなの作品を描きました[図4]。

「アジア建築集合体」の建築教育の活動としては、先ほども少し触れましたが、「アジア建築新人戦」を毎年開催しています。アジア15カ国の国内大会から選ばれた学生の作品を集めて競い合うコンテストです。大学で取り組んだ設計課題が対象となりますが、創造的な意志と競争心を刺激することで、質の高い建築教育を提供することを目標としています。今アジア15カ国で大体5,000人がそれぞれの国の国内大会に参加していて、毎年25名ほどがアジア大会に参加しています。1回目は韓国のソウル、2回目は大阪、3回目は大連、4回目はホーチミンなど、毎年国を巡回していますが、今年は第10回目で、インドネシアのスラバヤでオンラインで開催します。

その「アジア建築新人戦」と日本の「建築新人戦」を合わせて、この5人で日本の建築学会の教育賞をいただきました[図5]。それと関連して、文部大臣表彰科学技術賞もその翌年にいただきました[図6]。その賞盾のメダルはヴィトルヴィウスの建築十書の挿絵のようです[図7]。

ベトナムには十数年前に一度旅行で訪れたのですが、そのときに知り合いになったホーチミン市建築大学の学長や先生たちと親しくなって、講演に呼ばれたりするうちにサイゴンの都市や建築に興味を持つようになりました。

それでは自己紹介はこれくらいにして、本題に入りたいと思います。



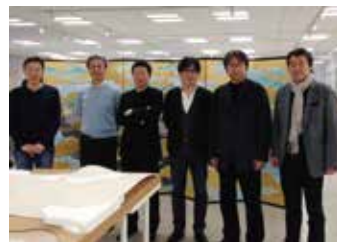
[図1]



[図2]



[図3]



[図4]



[図5]



[図6]



[図7]

LECTURE

今日は「ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化」をテーマとして、大きく次の3つのテーマに基づいて話を進めていきたいと思えます。

1. サイゴンの歴史とまちの特性
2. サイゴンの都市計画の系譜
3. トゥーティエム(Thu Thiem)の開発構想

1. サイゴンの歴史とまちの特性

ベトナムはアジアの中でも、日本よりずっと南の方の南シナ海に面しています[図8]。ベトナムだけを取り出すと、南北に細長い形をしています[図9]。

ベトナムは一般的に大きく3つの地域に分かれています。北部にハノイ、中部にフエやダナン、南部にホーチミンがそれぞれ位置しています。都市の名称がいろいろ出てきますが、混乱しないように整理をしますと、17世紀のフランスの植民地時代に、ハノイの北部はトンキン、フエの中部はアンナム、サイゴンの南部はコーチシナと呼ばれていました。

ハノイの「トンキン」は、漢字で書くと「東京」になります。このトンキンと日本の東京の相関性はよく分からないのですが、日本の首都の江戸から東京に変わったのは19世紀だったと思うので、なぜそのような呼び名に変わったのか、興味のあるところです。

アジアの漢字圏の国と言えば、4つあると思えますが、日本、韓国、中国と、実はベトナムも漢字を使っていました。ハン・ヴィエツ(hán-việt)というもので、漢字の音読みです。例えば「建築」の発音は、日本語は「ケンチュク」、韓国語は「ゴンチュク」、中国語は「チエン ギュー」、ベトナム語は「キエンチュク」と読みます。少し発音が似ていますが、これは同じ漢字からの発音なので、同じ文化圏と言えます。

これから簡単にサイゴンの歴史に触れたいと思えます。最初のベトナムは、この黄色色のところだけの領土だったのですが、それがどんどん南下してきて、現在の領土になりました[図10]。ベトナムの領土が伸びていく過程が、この横並びの地図から分かりますが、左から右へと拡張されていきます[図11]。



[図8]

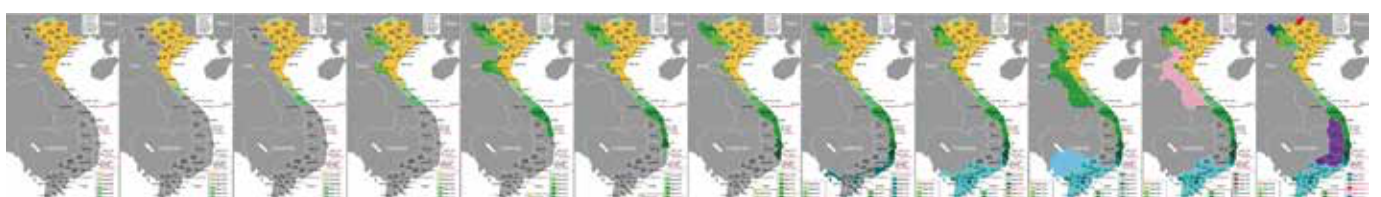
[図9]



[図10]

サイゴンの歴史の変遷

サイゴンという都市の名称は時代と共に3回変わりました。サイゴンは、先ほどの地図にも描かれていますが、16世紀まではカンボジアのクメールの領土で、そのときには「プレイ・ノコール」と呼ばれていました。これはクメール語で、「森のまち」という意味のようですが、今でもサイゴンは「フォレストシティ」と呼ばれています。クメール時代のサイゴンは、沼地で小さな漁村でした。シンガポールも小さな漁村から始まっているので、同じような感じだったと思えます。



[図11]

次に、16世紀から17世紀にかけて、グエン王朝の時代にサイゴンは「ジャーディン (Gia Dinh)」に変わりました。グエン王朝はフエに現在の世界遺産のフエ城を築きますが、そこでいろいろな内乱が起きて、サイゴンに多くの人が逃れてきて、徐々にベトナム人が増えてきました。クメールのチャンパ王国は、現在のタイのシャムと対峙する関係にあったために、ベトナムの流民が南下してくるのを、コントロールする余裕がなくなったようです。その隙を狙い、ベトナムのグエン王朝がサイゴンに首都をつくり、そこからサイゴンの歴史が始まることとなります。

それと同時に、17世紀の明朝末期に清に抵抗する集団が明からたくさんベトナムに流れてきました。そのときにフエにたどり着くのですが、当時の王朝がそれを許さなかったため、彼らはもっと南下して今のサイゴンに住み着いたわけです。あとから出てきますが、それでサイゴンの5区に世界で一番大きいチャイナタウンができたのです。

2回目は、フランスの植民地時代、1884年から1945年の植民地時代にサイゴンに変わりました。サイゴンの意味については、いろいろな説がありますが、当時プレイ・ノコールの土地には綿花がたくさんあって、その綿花の木ということで「cây gòn」が「サイゴン」になったとか、あとはサイゴン川が流れているところに堤防みたいなものがたくさんあって、堤防をベトナム語で読むと「タイ・ゴン」なので、それが「サイゴン」になったという説もあります。

最後の3回目は、ホーチミンという名前に変わりました。ベトナム戦争が終わった1976年以降になりますが、ベトナムの英雄のホーチミン氏を讃えてホーチミン市と都市の名前が定着したわけですが、ただ、人の名前と都市名がすごく混乱することもあるので、ここの南部の人たちは今でもみんな「サイゴン」と呼んでいます。

ホーチミン市の人口と経済

サイゴンの人口や経済のことにも少し触れたいと思います。現在、ホーチミン市は16区5県1市です。市の中にまた市があるというのは、日本の感覚では混乱するかもしれませんが、いわゆるホーチミン市直轄の都市みたいなものです。

ホーチミン市の人口は1,120万人と公表されていますが、実際には1,300万人程度だろうといわれています。人口密度は田舎のローカルなところも含まれているので、平均すると4,363人です。東京の15,000人に比べて、人口密度が低いように見えますが、実際の中心市街地では、実感的に東京よりも高いのではないかと思います。

気候としては熱帯気候で、今はちょうど雨季になりますが、毎日スコールが降って涼しい季節です。

1人当たりのGDPがおおよそ3,000ドルで、これはベトナムの平均ですが、サイゴンに限って言うと、恐らく1万ドルは超えていると思いま

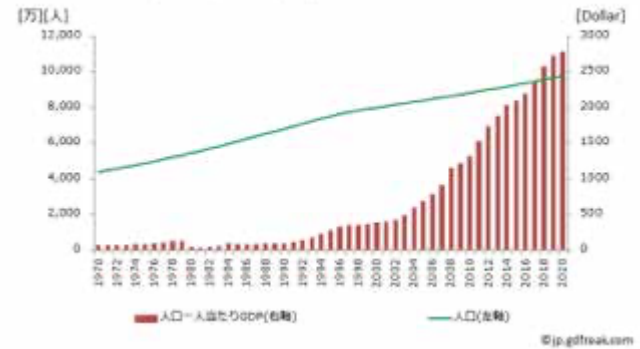
す。物価は日本と比べて決して安くはないです。

平均年齢ですが、これがまたすごく若くて31歳です。ちなみに日本は今45歳です。都市人口率※1は大体34%です。

ベトナム全体の人口の推移は1970年の4,000万人強から緩やかに伸びてきて、現在は1億人弱になっています[表1]。

※1 その国の全人口のうち、都市部に住む人の割合。

人口と人口一人当たりGDP(米ドル名目)の推移



[表1]

中心部に川が流れる世界の都市

サイゴンは中央の中心市街地から南北に縦長くなっています[図12]。南シナ海に流れ出るサイゴン川は、サイゴンを南北に曲がりくねりながら東西にまちを分けています[図13]。インドチャイナの時代、フランス人による都市計画はサイゴン川の西側を中心に開発されてきて、最近になって東側の開発が進められています。それには地盤の影響や川幅の広いサイゴン川を渡るための橋をかける技術の問題もあったようです。

川が都市の中に流れている世界の都市は、調べてみると、結構あります[図14]。パリはセーヌ川ですね。ローマはテヴェレ川、韓国は漢江、ブダペストはドナウ川、ロンドンテムズ川、ケルンはライン川が都市の中を流れています。

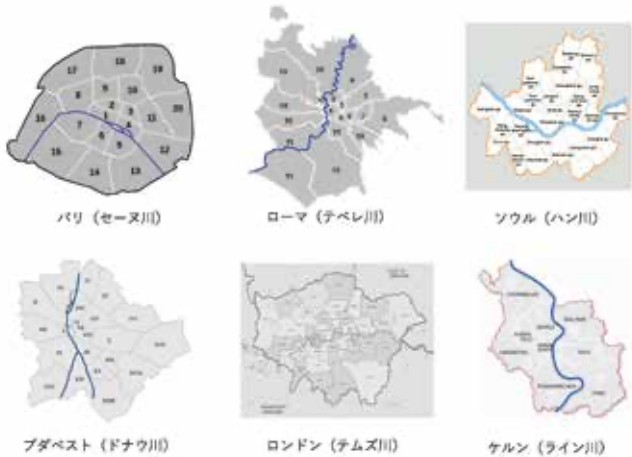
川と区割りのことで言いますと、例えばパリの場合は、川に面しているところから時計回りに1、2、3、4、5、6と、規則正しく区を決めています。これが一番分かりやすい事例だと思います。ローマの場合は、川が南北に流れているせいもあって、左側と右側で非常に街の性格の違いが出ています。韓国の場合も、漢江によって北と南に分かれていて、川の北は旧市街地、南はカンナムスタイルという歌にもあるように江南という1970年代～80年代に開発された新都市です。ブダペストも東西に分かれており、それぞれの都市文化が全く違うという特徴があります。これらの事例から、川に分断された都市の地域のイメージが異なるのは非常に興味深いところです。



【図12】



【図13】



【図14】

サイゴンの区分け

では、川が南北に流れて東西に市を分けているサイゴンは、どのような特徴をもって、どのような区分けをしているかについて説明したいと思います。まず、川の東側はインフラや地盤などの理由から開発が遅れていた地域で、これから新都市の建設が計画されています。そして川の西側はサイゴン港が設けられ、中心市街地が形成されています【図15】。

南シナ海からサイゴン川に沿って北上していくと、サイゴン港に出ますが、ここに面しているところが1区になります。続いて2区、3区、4区、5区とありますが、1区とその隣の3区が旧市街地です。チャイナタウンのある5区は、「大きい市場」という意味のチョロンと呼んでいますが、最初はサイゴン市とチョロン市は分かれていて、後から合併されました。フランスの植民地が終わる1954年まで、サイゴンには7つの区しかなかったようです。

最初の区割り、みんな川の西側に位置していましたが、最近のものを見るとまた変わっています【図16】。1区、3区は同じですが、2区は1区に統合されて、新しい2区が川の東側のトゥーティエムの方に移動したため、現在の区分けは規則性がなくなりました。

さらに、去年12月に今の2区と9区、それとトウドウック地区が合併して、トウドウック市になりました。ホーチミン市の中の直轄の市になります。

川を挟んでこの2区の下に7区がありますが、今の韓国の江南のよ

うに、お金持ちが住んでいる新しい街です。それと後からも出てきますが、この2区の先のところがトゥーティエムという区域です。ここが今非常に面白い場所なので、後ほど詳しく紹介したいと思います。



【図15】



【図16】

サイゴンの中心市街地

今日は時間が限られているので、1区、2区、3区、7区を中心にお話ししたいと思います。サイゴンを上から見たときのような感じです【図17】。真ん中あたりの緑に囲まれているところが独立宮殿で、その反対側に伸びている緑のところが植物園なのですが、ここに東西の大通りからなる都市軸があります。この軸線は17世紀の都市計画から今も全く変わっていないコアなところなんです。

中心市街地の1区と3区には、歴史的建造物がたくさん残っていますが、1区は都市計画の中心的な建物が多く、3区は大使館や領事館がたくさん集まっています。そしてその北側にローカルなビンタイン区、ゴーヴァップ区、フーニャン区が位置しています。

私は今ビンタイン区に住んでいますが、この区域は1区と3区を中心市街地のベッドタウンです。ビンタイン区は非常に広いですが、最近この地域は開発が活発に行われていて、高級な高層マンションが建っています【図18】。この高い塔のような建物は、Landmark 81といって、今サイゴンで一番高い建物になっています。Atokinsという設計事務所が設計したものです。

ゴーヴァップ区にはタンソンニャット国際空港があり、非常にロー

カルな街ですが、フーニャン区はその中間ぐらいのレベルで、準高級住宅エリアとなっています。

もう少し1区と3区について話をしたいと思います。上から見た様子はこのようになっていて[図19]、この黄色いところが1区で、赤が3区です。今日はずっとこの話をしていくので、この道の名前を覚えてほしいと思います。このグエン・ティ・ミン・カイは、東西の一番古い通りで、ハイ・バ・チュン南北の古い通りです[図20]。ベトナムの道路名には、中国との戦争で活躍した英雄たちの名前が付けられています。グエン・ティ・ミン・カイは女性ですが、中国の前漢時代の人物です。ハイ・バ・チュンは2人の姉妹ですが、この姉妹も歴史的な英雄の人物です。



[図17]



[図18]



[図19]



[図20]

1区の大聖堂を中心とした都市計画

次に、1区と3区にどれくらいマイルストーンになるような建物が存在するかをピックアップしてみました[図21]。1～12番は1800年代に建てられた建物で、13～18番が1910年～20年代の建物です。ほとんどフランス人による設計で、建設工事にお金を出したのは華僑のお金持ちです。19、20番は1960年～70年代に建てられたベトナムの近代建築ですが、後で少し触れたいと思います。

それでは、簡単に建物について紹介します。1番がノートルダム聖堂です[図22]。フランスの建築家のジュール・ブラールが設計しました。面白いのは、フランス人によるサイゴンの都市計画は、この聖堂を中心に行っているところです。ここの住所を見ていただくと、「1 Cong Xa Paris St. Dist.1. HCMC」コンサーパリストリート1、ホーチミン市1区と書いてありますが、コンサーというのは会社の漢字読みです。つまり、パリ公社通りの1番が大聖堂になっているのです。この聖堂はサイゴンに駐屯したフランス軍のためのもので、パリのノートルダム大聖堂をモデルにして設計したといわれています。これを一つの目印にしてサイゴンを見ていくと、非常に面白いと思います。

パリ公社通りの2番は、大聖堂の隣にあるサイゴン中央郵便局です[図23]。これはパリのオルセー駅がモデルになっていて、エッフェル塔を設計したエッフェルが関わっているのですが、どこまで彼が設計したのかは定かではありません。ここで一つ残念なのは、建築遺産の保存の仕方です。元々の建物は色が塗られていなかったのですが、今の外観は黄色く、中は緑などのペイントが塗られているのですが[図24]、元のまま保存していたほうがよかったのではないかと思います。

次に3番以降の説明をしていきたいと思います。1番の聖堂を中心に置き、本国フランスとの通信のために2番の郵便局をつくり、3番の病院[図25]、4番の教育施設[図26]、5番のホテル[図27]、6番の娯楽のためのオペラハウス[図28]といった感じでどんどん広がっていきます。それから7番の市庁舎[図29]、8番の博物館[図30]が出来ていきます。裁判所[図31]は最初と同じ用途で使っていますが、最初は別の用途だった建物もたくさんあります。

10番は総督邸です[図32]。総督はここに住んでいたのですが、1962年に爆撃を受けて全壊したので、その後1966年にベトナム人建築家のゴ・ベト・チュー(Ngô Viết Thụ)が新しくモダニズムの建築をつくりました[図33]。彼はエコール・デ・ボザールを出て、ベトナム人で唯一のローマ建築賞をもらった建築家で、ベトナムに戻ってから設計事務所を開業し、かなりの力作を残しています。

12番はホーチミン博物館です[図34]。これはホーチミン氏がフランスに行くときに使ったことがあるので、彼の名前が付けられています。元々は税関の建物でした。13番はフランス人の設計で、1915年～1925年にベトナムの華僑のお金持ちがづくらせた豪邸です[図35]。

14番はベントインマーケットで[図36]、15番はサイゴンで初めて木製エレベータが設置された美術博物館です[図37]。16番はオーギュスト・デルヴァルが設計した博物館です[図38]。一見すると非常にアジア的な建物ですが、インドシナ様式といって、いわゆる西洋近代モダニズムとアジアの伝統様式を折衷してつくられたもので、こうしたものが今もたくさん残っています。

17番はマジェスティックサイゴンで、開高健が宿泊しながらベトナム戦争の小説を書いたとされるホテルです[図39]。皆さんがサイゴンに来られたら、ぜひこのホテルに泊まっていたいただければと思います。

18番はインドシナ銀行と呼ばれていたベトナム国立銀行ホーチミン支店です[図40]。この建物の屋根を見ていただくと面白いのですが、当時はエアコンがなかったので、内部を涼しくするための工夫が見られます。屋根の中央部はピラミッド状に段違いの庇が重なっていて、その間を風が通るようにしています。カンボジアのプノンペンにあるセントラルマーケットもこれと同じ考え方で設計されています。

19番はホーチミン市総合科学図書館ですが[図41]、これは以前にホーチミン建築大学の先生をやっていたグエン・フー・ティエン(Nguyễn Hữu Thiện)とブイ・クアン・ハイン(Bùi Quang Hanh)が設計した建物です。これも西洋モダンとベトナムの伝統様式を折衷したもので、非常に面白い作品だと思います。

これまで紹介した建築の中で、ブリーズ・ソレイユがたくさん出てきました[図42]。横の庇ひさしではなく縦の庇をブリーズ・ソレイユと呼んでいます。日照を調整する装置です。こういうものは現代建築でもたくさん見受けられますが、これはル・コルビュジエが立面構成の要素として造形化してブリーズ・ソレイユと呼ばれるようになり、名前もコルビュジエが名付けたといわれています。

こうした建築的な要素は、今のベトナムの現代建築においてもたくさん取り入れられていて、冬がある国とは建築の違いがあるのではないかと思います。壁が自由で、構造的なものから解放されています。空間全体が非常に開放感があって、トロピカルな建築です。



【図22】



【図23】



【図24】



【図25】



【図26】



【図27】



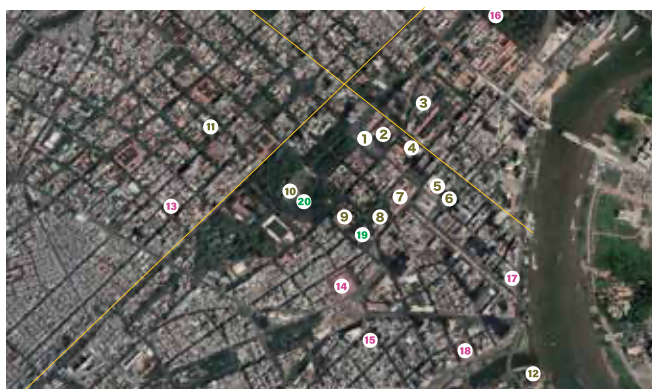
【図28】



【図29】



【図30】



【図21】



【図31】



【図32】



【図33】



【図34】



【図35】



【図36】



【図37】



【図38】



【図39】



【図40】



【図41】



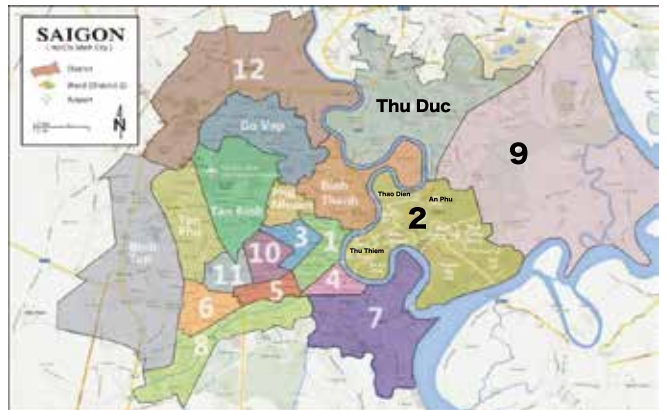
【図42】

トゥドゥック市の開発ブーム

トゥドゥック市は、トゥドゥック地区と2区と9区を合わせてできたものですが【図43】、100万人都市を計画するようです。

2区は元々、軍の施設があったために開発が遅れてきたのですが、今は一番ホットな場所です。この中でも特にトゥーティエム新都市は非常に興味のある地域です。これがトゥーティエムの現在の開発のイメージです【図44】。1962年から世界中の建築家やアーバンプランナーがトゥーティエムの開発を提案したプロジェクトがありますので、それを最後のところで紹介したいと思います。

それと9区はこれから新しい空港が近くにできるので、マンションの開発が非常に盛んなのですが、その中でベトナムの三大デベロッパーの一つ、ビンググループ(Vingroup)がつくっているピンシティ(VinCity)があります【図45】。



【図43】



【図44】



【図45】

チャイナタウンの様子

5区はチャイナタウンなのですが、こちらではチョロンと呼んでいます。「チョ(chợ)」はベトナム語で市場、「ロン(lớn)」は大きいという意味です。大きい市場という意味ですが、それがそのまま地名になりました。今は大体6割ぐらいは華僑が住んでいるといわれています。

5区を中心に6区、10区、11区も、みんなチャイナタウンになっています。それぞれローカルな雰囲気の違いの中、中華街のイメージです【図46】。

これは大きいマーケットのピンタイ市場です【図47】。この5区の様子を見ると、ほとんど中国的なイメージが強いです。この建物は華僑たちがお参りをする廟です【図48】。

19世紀のサイゴンを舞台にした映画に、このチョロン【図49】やサイゴン港など、当時の様子が分かる場面がたくさん出てきます【図

50]。映画のタイトルは、フランス語で「ラマン(L' amante)」、中国語では「情人」、日本語では「愛人」と訳されています。



【図46】



【図48】



【図47】



【図49】



【図50】

7区(フーミーフン)の開発

7区は韓国のソウルの江南のような、お金持ちが住んでいる新しい街ですが、台湾のデベロッパーのフーミーフン社(Phu My Hung)が開発した区域で、会社の名前がそのまま地名になりました。今ではフーミーフンと言ったら、7区の新都市で高級というイメージをみんなが持っています。現在は韓国人がたくさん集まって住んでいるコリアンタウンになっています。写真で見るとこういう感じです【図51】。

このフーミーフンは、台湾のデベロッパーが地盤整備や基本的なインフラの整備などを行いました。実際に都市計画のマスタープランを設計したのは、アメリカのSOM※2です。SOMはサイゴンに来て、7区にいろいろな提案を行いました。すべてが受け入れられたわけではないです。しかし、都市計画のアイデアとして提案されたものは、今も活かされています。建物に関しては、デベロッパーによってそれぞれ自由につくられていますが、まちの質的なコントロールという課題は残されていると思っています。

※2 Skidmore, Owings & Merrill(略称 SOM)は、1936年にシカゴで結成された、アメリカ最大の建築設計事務所。超高層ビルをはじめとする大きな商業建築を主に手がけている。鉄とガラスからなる箱状の「インターナショナル・スタイル」と呼ばれるモダニズム建築様式を世界中に広めた。



【図51】

ローカルで自然豊かな郊外

4区、8区、12区はローカルな雰囲気のある街です。地図で見るとこの辺りです【図52】。さらに中心市街地の南北側の郊外にはクチ県、ホクモン県、ビンチャイン県、ニャベ県、カンゾ県の5つの県があります【図53】。カンゾ県にはマングローブがあり、非常に景観が美しいところです【図54】。まだ開発はされていないですが、この地域は保存してほしいと思います。

郊外から中心市街地に近くなるにつれて、住宅の密度がどんどん高くなっていきます。ニャベ県は7区のフーミーフンの近くに位置していますが、ここも今かなり住宅地の開発が行われていて、数多くのプロジェクトが進んでいます。

ベトナムに来て驚いたのは、ベトナムの住宅も日本の町屋のような、「うなぎの寝床」の形状をしています。それをこちらでは、ニャフォー(nhà phố)またはショップハウスと呼んでいます。そのような形式の開発がかなり行われています。昔の日本でいう、ミニ開発みたいなものです。みんな同じ形をした住宅が長い列を成して並んでいる風景をよく見かけますが、これはデベロッパーには良い商売になるということで、大量につくられています【図55】。



【図52】



【図53】



【図54】



【図55】

2. サイゴンの都市計画の系譜

これからサイゴンの都市計画について説明したいと思います。グエン王朝は、フエからサイゴンに首都を決めたときにフィエン・アン城を最初につくりました。そのお城は、国の情勢が安定せず、内乱が頻繁に起こっていた時代でしたので、かなり防御のイメージが強いものになっています。お城の建設において、グエン王朝は当時サイゴンに来ていたフランス人の司教たちに頼んでフランス人のエンジニアがこのお城を設計しました。

このフィエン・アン城は、ヴォーバン様式の形をとっています[図56]。元々15世紀のイタリアで盛んになった防御的な城塞建築です。例えば日本にも北海道に五稜郭[図57]があります、これもヴォーバン様式です。星形要塞が発展した様式です。

なぜフランス人がヴォーバン様式にしたかという、ヴォーバンというのはイタリアの建築家の名前なのですが、彼は17世紀の終わり頃にフランスのルイ14世の技術顧問だったこともあって、フランスにたくさんこうした形式が広がりました。その影響を受けたフランスのエンジニアも、ヴォーバン様式でサイゴンに初めてお城をつくったのですが、このヴォーバン様式はアジア的に考えていくと八卦に近いということで、ベトナムでは八卦の城と呼んだり、亀の甲羅に似ているということで、亀城と呼んだりしています。

1790年のサイゴンの地図を見ると、真ん中にそのフィエン・アン城が描かれていて、道路が格子状に広がっています[図58]。左下にはチャイナタウンのチョロンが描かれています。そして1815年のサイゴンの地図は、測量したかのように以前のものに比べて詳細に描かれています[図59]。ここにも左上にチャイナタウンがBAZAR CHINOISという文字とともに描かれています。

この中に描かれているお城を詳しく見ると、城内の空間構成が分かります[図60]。冒頭でも言いましたが、中心市街地の2つの古い道路のハイ・バ・チュン通りとグエン・ティ・ミン・カイ通りがこのお城の中に描かれています。そしてハイ・バ・チュン通りと都市軸になっているレ・ズアン通りが交差する右下にお城の宮殿が配置されていますが、現在、この宮殿の跡地にはインターコンティネンタルホテルが建っています。当時この土地は「金の土地」と呼ばれ、最も高い値段で売られて話題となっていました。現在のサイゴンのインフラは、このお城の建設で出来たものが下地になっていると言えます。

実際に現在のサイゴンを上から見ますと、大きい正方形に囲まれた場所がフィエン・アン城の跡地です[図61]。このお城は内乱のときに、次の2代目王朝によって全て壊され、新しく別の小さいお城のザーディン城がつけられました。小さい正方形がその城があった場所ですが、それもフランス軍によって破壊されました。現在は2つとも残っていませんが、それが面していた道路は今でも残っています[図62,63]。



[図56]



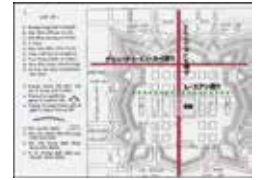
[図57]



[図58]



[図59]



[図60]



[図61]



[図62]



ハイ・バ・チュン通り



グエン・ティン・チュウ通り



レ・ズアン通り



ナム・キー・コイ・ギア通り [図63]

コフィンプロジェクト

1860年代以降、数多くのフランス人によってサイゴンというまちがどんどん変わっていきます。まず、コフィンという軍の大佐のエンジニアが、最初の都市空間計画として1862年に25平方キロメートルの面積に50万人都市をイメージして絵を描きました[図64]。これは最初の近代的なサイゴン・プロジェクトになりますが、ほとんど絵的なものが多いということで、実施されなかったようです。彼が失敗した要因としては、実際の実用主義と絵で描いた理論を調和させることが非常に難しかったことが挙げられています。しかし、これは後のサイゴンの都市計画のバックボーンとなり、彼の案に影響されたものも数多く提案されています。



【図64】

ベルトゥーらによる都市計画

コフィンの後に、ベルトゥー(M. Betraux)やエルネスト・エブラール(Ernest Hébrard)、セルッティ(Cerutti)、プニエール(Pugnaire)といった、いろいろなエンジニアやプランナーがサイゴンの都市計画の提案を行い、まちがどんどん拡張されていきました。

このベルトゥーの計画が評価されている理由は幾つかあります。まず、ベトナムで初めて地形学や地質学の調査を行ったことです。そして、数学や平面幾何学、空間幾何学という原理を都市設計に用いたことも高く評価されています。さらに、街路や道路は市松模様の広場に配置されましたが、これはバルセロナもそのようにつくられていて、ヨーロッパの都市計画の基本原理になっています[図65]。

主要道路はサイゴン川から風を受けるように配置されているので、サイゴンは夏でも夜に海からの風が吹いてきて、他の都市に比べて非常に涼しく感じます。ラウンドアバウト、これは日本でいうロータリー、環状交差点です。そしてノートルダム大聖堂を中心とした緑の盆地計画[図66]や、94の通りの交通システム、それから道路の両側に植えられた樹木の密度、パブリックスペース、2階建てに抑えられた住宅、順番につけられた家の住所など、近代的なサイゴンの計画はこの時代に完成されました。このなかでも特に樹木は常夏のベトナムにおいて日陰が涼しい場所をつくり、景観的にもこれらの樹木を

見ると、「ああ、サイゴンに来たな」というサイゴンの心理的なシンボルとなっています[図67]。

これからサイゴンの都市計画を描いた図面や絵を年度別に見ていきたいと思います。1867年に出されたサイゴンの都市計画には、フランス軍に破壊された2番目のお城のザーディン城が入っており、東西のグエン・ティ・ミン・カイ通りと南北のハイ・バ・チュン通りがはっきり描かれています[図68]。しかし、後の都市軸となるレ・ズアン通りはザーディン城の跡地に遮られ、まだ真っ直ぐになっていないのが分かります。

次の1878年の図面では、まだレ・ズアン通りは完成されていませんが、フランス総督邸、後の独立宮殿が入っており、さらに以前より開発が広がっているのが分かります[図69]。その計画を立体的に描いたのが1895年の絵[図70]です。この絵を見ますと、大聖堂や総督邸の建築などが立体的に描かれています。

1896年の図面では、都市軸のレズアン通りが完成しており、その東側に植物園がつくられています[図71]。そして、左側には1885年に完成した、サイゴン・ミトー間の鉄道が描かれており、港湾施設や裁判所や病院といった建物もできています。

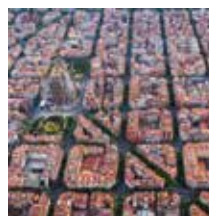
1920年の図面では、さらに市街地が拡張されています[図72]。

エルネスト・エブラール(Ernest Hébrard)が1923年に描いた絵では、サイゴン川からベントイン市場、そして現在の市役所につながる運河が描かれています[図73]。

次は1943年にセルッティが描いた絵です[図74]。既存のものをベースにして、サイゴンセンターを新しく計画する提案を描いています。

1943年に描かれた絵は、インドシナの首都としてのサイゴンの都市計画が完成されたものです[図75]。現在の街路や道路のかたちとほぼ同じです。当時は列車が走っていて、現在のベントイン市場の隣にサイゴン駅がありました。今は駅をサイゴンの西側に移転したので、路面電車は全てなくなりました。

最後に、現在のホーチミンの様子です[図76]。



【図65】



【図66】



【図67】



【図68】

3. トゥーティエムの開発構想

これから2区に位置する新都心のトゥーティエム(Thu Thiem)の話をしたと思います。サイゴン川は真っ直ぐではなく、曲がりくねりながらサイゴン市の中を流れていますが、このクネクネが面白い形状のまちをつくっています[図77]。トゥーティエムもその一つで、中心市街地の右向かい側に、鼻のように丸く突き出している地域です。

トゥーティエムの開発は、市街地に近い立地のメリットを活かしてビジネス街の建設を目指しています。中国の上海(浦東新区)や深圳のような都市をモデルとして、面積700ヘクタール、人口およそ85万人が計画されているようです。

トゥーティエムにアプローチできる場所は2ヶ所あります。一つは市街地の西側から川底につくられたトンネルを通過して渡ります。もう一つは市街地の北側のトゥーティエム橋を通過して渡ります。

トゥーティエムの開発は、このサイゴン川が大きい障害となっていました。約300メートルもある広い川幅や、川の早い流れのサイゴン川に橋をかける高度な技術と莫大な費用の問題が解決されなかったために、トゥーティエムは長い間、開発が進展されませんでした。

当時のフランスのプランナーたちも、そのような理由からこのトゥーティエムの開発をみんな拒んでいました。さらに、トゥーティエムは低地だったために常にサイゴン川が浸水したので、地盤の問題も考慮され、市街地を拡張するとしたら、もっと北の方に伸びていくべきだとして、北部の開発をずっと推奨していました。

しかしながらこのトゥーティエム地域は、川を渡ればすぐに中心市街地に行くことができるロケーション・メリットがあり、1950年代後半から開発の提案が数多く行われてきました。ベトナム人建築家のホアン・フンは、1958年にトゥーティエムに新しい行政や文化圏を建設する提案をしています[図78]。その後、ベトナム政府の招待やコンペなどで外国人による提案が行われていますが、その代表的なものを3つ、年代順に紹介したいと思います。



[図69]



[図70]



[図71]



[図72]



[図73]



[図74]



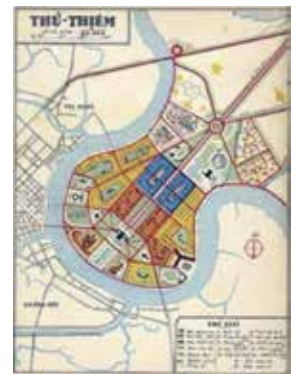
[図75]



[図76]



[図77]



[図78]

ドクシアディスによる開発提案

最初に、皆さん非常に懐かしい名前だと思うのですが、アーバンデザイナーのドクシアディスが提案したプロジェクトがあります。ドクシアディスといえば、当時、私の年代はみんな彼の本を1冊以上読んだことがあると思います。私はEkistics Theoryという人間居住科学、ギリシャ哲学でもある基本的な論理、線形の住居の発展モデルなどを勉強していました。

1965年にベトナム政府は、サイゴンの将来の開発の方向性を研究するためにドクシアディスをサイゴンに招待します。政府はドクシアディスに2つの研究課題を与えます。一つはサイゴン市街地の開発計画を提案すること、もう一つはベトナム南部の気候に適した住宅モデルをつくることでした。彼はその要請を受けて、いろいろな提案を行っています。

まず、先ほどのベトナム人のホアン・フンさんが提案した、トゥーティエムに行政や文化の街をつくる案を拒否します。これはベトナム政府がオプションとして付けたかったようですが、ドクシアディスはそれができない理由を明白に述べながら拒否しています。トゥーティエムに行政施設を建てる場合、先ほどと同じ理由で経済的かつ技術的な問題、そして低地で地盤が弱いことから高層ビルは難しいと述べています。当時のベトナムの状況からして、それらの問題は解決できないとドクシアディスは判断したようです。

ドクシアディスは、都心の中心部をトゥーティエムではなく、サイゴンとピエンホアに高速道路をつくり、北に拡張することを提唱しています。かつてのフランス人の主張と似ています。その考えをもとに、彼は空港と港湾施設の移転を提案しました。サイゴンには今、タンソンニャット空港が中心市街地の西北のゴーヴァップ区にあります、9区の近くのロンタインに移転する計画が決まっています。ドクシアディスの提案が今になって実現されるわけです。そしてサイゴン港の施設を7区の南側にあるキャベ県に集中させることも提案しました。

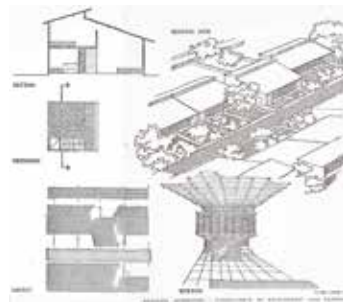
最終的に、ドクシアディスはトゥーティエムに低層の住宅地を提案しています。彼はサイゴンに来てから、ベトナムのいろいろな居住環境についての調査研究をしました。古い住宅地、貧しい地域、お金持ちと貧しい人が一緒に住んでいる地域を対象として、ライフスタイルや生活空間の調査を行い、それらの相関関係を捉えようとしています。それとベトナム人の住居に関するさまざまな要求、ニーズだとか、地元建築の材料や技術も研究しています。実際に117世帯、738人の居住者を対象にそのような調査を実施して、ベトナム南部の住まい方に関して、彼は非常に理解を深めています。

その研究成果をもとに、ドクシアディスはトゥーティエムに住宅地の提案を行いました[図79]。断面図を見ると、2階にロフトが設けられていますが、この空間構成は、ベトナムの熱帯気候に適応するためにサイゴンの都心部にある古い住宅地を観察することから開発され

たと言われています。このロフトにより居住エリアが立体的に増やされ、高くなった屋根は、地域の高湿多湿の気候に対応して風を内部に入れ込み、住宅内部の空気の流れをよくすることになります。

そして交通システムは非常にユニークなアイデアです。西側の古い道を用いて内陸とつないでいますが、トゥーティエムが沼地で常に浸水するので、住宅地を車道でつなぐのではなく、歩道だけでつないでいます。歩道といっても簡単なデッキのようなもので、実質的には運河を使い、船によって各家に入っていくアプローチが提案されています。マスタープランには、以上のような彼の環境に対する考えがよく反映されています[図80]。しかし、実際にはこの提案は全く実現されませんでした。その理由としては、沼地に対する考え方はよかったです。デベロッパーが土地を分割して売る方法や、技術的なインフラの問題を抱えていたため、実現されませんでした。

私は、ドクシアディスの研究方法や建築設計の学問的哲学が、もしベトナムの大学や建築家に広がっていたら、ベトナムは建築学や建築設計においてより発展したのではないかと思います。その機会を失ったのはとても残念だと思います。



[図79]



[図80]

WBEによる多機能都市モデルの提案

次に、アメリカのWBEグループ(Wurster, Bernardi and Emmons, Architects)が提案したものを紹介したいと思います。WBEはドクシアディスの失敗を参考にして、金融経済コンサルティング会社や運輸会社、インフラストラクチャエンジニアリング会社をグループの中に入れて、地質学と地形、交通量、地価、土地利用需要、費用分析など、実用的な計画を行いました。

1972年に多機能都市モデル、マルチファンクションシティというのが結構流行ったと思いますが、そうした概念をもとに、トゥーティエムの形状に従って円弧状の3層平行動脈系を中心に開発の計画を行っています[図81]。タウンハウスとヴィラを4階建ての集合住宅にして交互に建設することを提案するなど、ここで彼らは前回のよう失敗をするまいと思って、いろいろなアイデアを出していきのですが、結局これも実現されませんでした。

この案に対する批判としては、中心市街地との空間的な脈絡が全くないのと、例えば建築と公共空間のつながり、それから中心市街

地とトゥーティエムとの建築的、都市的な相互作用が全くないということが挙げられています。



[図78]

ササキ・アソシエイツによる計画提案

そして最終的に日系アメリカ人のヒデオ・ササキさんが設立したササキ・アソシエイツが、2003年にトゥーティエム・ニューアーバンセンター(Thu Thiem New Urban Center)のコンペで優勝して、この案が最終的なトゥーティエムのマスタープランになります[図82]。2012年までプロジェクトの調整が続きましたが、ササキ・アソシエイツが当時コンペで出したビジョンは「21世紀の新しい心」でした。彼らはドクシアディスやWBEの失敗を参考にした案も出しています。例えば、都市の相互作用の欠点を指摘されたWBEの案を補足する内容として、3つのオープンスペースをトゥーティエムにつくり、その空間から中心市街地が見えるようにするなど、いろいろな用途の公共空間を増やしています。そして中心市街地とは4つの橋でつながっています。ササキ・アソシエイツの案は、デザインの文化的アイデンティティーが欠けているなどという批判を受けましたが、現在はその案をもとに開発が進んでいます。

建物は、デベロッパーたちに売られた土地ごとに建設が行われています。まち全体をもう少しデザイン的にコントロールできれば、世界に誇れるまちにできたのではないかと思います。実際にこれからトゥーティエムがどのようなまちになるのかは誰にも分からないので、ベトナムのアイデンティティーを示すような、新しい未来の都市をつくってほしいと思っています。

個人的な話になりますが、私は以前からどこの国でもいいので、アジアのデザインの理念や哲学をもとに、まちをつくりたいと思ってきました。ベトナムにはそのようなチャンスがあるのかなと思って期待しています。近い将来、そのようなものができたらいいなと、それを皆さんに報告できる機会があればいいなと思っています。



[図82]

トゥーティエムの現在の様子

これは中心市街地からトゥーティエムを見ている写真です[図83]。これ以上のものはないような非常に美しいまちです。ただ、地盤が弱く浸水の恐れがあるので、その辺りはエンジニアの分野で考えなければいけないのですが、それを解決できれば、たぶん世界でも類を見ない、ベトナム固有の特徴を持ったまちができるのではないかと考えています。

これはトゥーティエムから中心市街地を見ている写真です[図84]。最近、リバーフロントの開発が進行しています。写真の左から2番目の曲線が美しいビルは、メキシコのザパタという建築家がデザインした金融会社の建物です。非常にシンボリックな形をしているので、アオザイビルとも呼ばれ、今ではサイゴンのシンボルになっています。そして一番右側の階段のような建物は、日建設計が設計したものです。



[図83]



[図84]

現代の都市計画の問題点

最後に、ベトナムの都市計画の問題について少し触れたいと思います。サイゴンの中心市街地を見て回ると、数多くの近代の建築遺産に出会います。しかし、マンションや商店など、既に壊された素晴らしいコロニアル建築もたくさんあります[図85]。その跡地には高層ビルが建てられているわけですが、ベトナムでもそれは駄目だということに気が付き始めて、2014年からいわゆるオールドサイゴンの集团的記憶をどのように現代に生かしていくかということ、みんなもつと真剣に考えるようになりました。

サイゴンの道路ネットワークを見ると、中心市街地の1区と3区は規則正しく格子状につくられています。その後に出てきた区域は、非常に不規則な形をしています[図86]。例えば、私が住んでいるピン

タイン区の敷地割の地図を見ても、その不規則さが分かります[図87]。ベトナム語で、通りはドウオン(Đường)、路地をヘム(hẻm)といます。これらのドウオンとヘムが各区域には非常に複雑に入り組んでいます。ヘムにはものを売のお店や食事をする食堂、コーヒーがゆっくり飲めるカフェ、美容室などがあって、いつも人びとが出たり入ったりしています[図88]。そして子どもが遊んだり、人が新聞を読んだり、しゃべったり作業したりして、人びとのあらゆる生活が表にあふれ出ています[図89]。

今、住宅地として計画されているプロジェクトを見ると、全く生活に対する考えが反映されていません。現在、ベトナムの都市計画や建築の方向性というのは、ほとんどアメリカを向いているように見えます。アメリカの生活パターンにあこがれたアメリカンスタイルの住居、特に7区のフーミーフンはアメリカそのものなのです。アメリカのライフスタイルをそのまま移した住宅地とも言えます。今のベトナムの都市や建築には、文化的かつ空間的文脈の欠如が見られます。大学においても、生活空間に対する研究もなければ、デザイン的な理論も見られません。市場が成熟していない分、都市開発は有名な外国の事例のコピーを謳いながらきれいに包装された偽物なのです。先ほどのドキシアディスの生活居住科学が、当時のベトナムの大学の研究やデザインに影響していたらもう少し変わってきたかもしれないと前で述べたのも、このような文脈によるものです。

ベトナムは資本主義ではなく社会主義の国です。表から見ると資本主義に見えますが、実際に中に入っていくと、そうしたものの実態が見えてきます。実際にコミュニティの概念が非常に薄く、ベトナムはコミュニティよりもアソシエーションのほうが強い社会だと感じます。例えば、私はマンションに住んでいるのですが、隣の人と会っても、エレベーターで出会っても、全くあいさつをしません。それは私だけでなく、ベトナム人同士でもそうです。だからコミュニティというのは、やはり社会主義の国においては違うのかと思います。もちろん職場の友達や、家族や親戚に関しては、日本と同じぐらいかそれ以上の付き合いがあるのですが、近隣関係、地域のコミュニティに関しては全く違うのです。

それらの違いが生活空間に影響し、さらにベトナム全体の都市計画や建築設計にも影響しているのではないかと思います。「俺以外は知らんぞ」という自己中心的な態度でデザインをすることが常態化しています。それが私としては理解できないし、納得できないので、いろいろと提案をしていくと、彼らは「それはいらない」とはっきり言います。

今のベトナムにおいては、結果として生活空間に関して興味がないのではないかと思います。そのような状況は、非常に危険というか、残念なことです。でも私は自分の仕事の中では何らかのかたちでそれを表現していこうと思っています。

では、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。



[図85]



[図86]



[図87]



[図88]



[図89]

DISCUSSION

重村力(神奈川県工学研究所客員教授)

柏原沙織(東京大学新領域創成科学研究科自然環境学専攻特任助教)

山家 李先生、ありがとうございます。私は、ホーチミンはトランジットでしか立ち寄ったことがないので、ぜひ行ってみたいと思って聞かせていただきました。

せっかくの機会ですので、質疑応答の時間にしますが、最初に私からコメントと質問をしたいと思います。

まずコメントですが、ドクシアディスがトゥーティエムに関わっていたというのは非常に驚きでした。どのようなご縁かというのがありますし、何よりもドクシアディスの先見性といいますが、もちろんプランの素晴らしさもありますが、当時からいろいろな階層の人をミックスして住ませるとか、そういう計画を立てていたというのは非常に驚きで、すごいなと思いました。本当に出来たらどのようなことになっていたのか、元々の地勢の読み込みとか、そうしたものも含めて見てみたかったというのがありました。

二つ目は、最後のコミュニティのお話ですが、例えば日本に置き換えたときに、日本も高層マンションや新しい居住地、建物では、なかなかコミュニティが希薄な部分もあると思うのですが、先ほどの路地、ヘムをめぐるようなショップハウスのような場所にあっても、やはりコミュニティというのは感じられないものではないでしょうか。

李 そんなに強くないと思います。けんかをしている場面はよく見かけます。なぜあんなにけんかをしているのだろうといつも思うのですが、これは中国でも同じです。例えば私の後輩の中国人で、大学で「コミュニティ理論」という授業を受けている学生がいました。その学生は、「いや、これは中国に帰ったら何の役にも立たないのに、何でこの授業を受けないといけないのか」といって非常に文句を言っていました。「コミュニティの概念はうちにはないのです」と言っているのは、中国もベトナムも同じ社会主義ですよ。監視社会が招いた結果かも知れません。

以前はどうだったかという話をよく聞きました。例えば南ベトナムというのは、ベトナム戦争以前は民主主義国家だったので、当時のコミュニティはどの程度のもだったかと、南ベトナムに生まれて育った人に聞くと、そのときはみんな仲良く付き合っていたと言うのです。今はなぜ薄いのかと考えてみると、やはりベトナム戦争で南北が互いに殺し合いをしてきたので、お互いを信じ合えないことが大きいのかも知れません。もちろん社会性は人が変えられるものではないのですが、それがデザインに影響するのは間違いないと思います。そうしたことを若い学生にも話をし、言い聞かせているのですが、どこまで彼ら

が理解しているかは、私にも分からないところがあります。

それと先ほどのドクシアディスの話ですが、ドクシアディスはギリシャ系のアメリカ人です。トゥーティエムのプロジェクトに関しては、アメリカ政府とベトナム政府の共同開発チームがあって、アメリカの代表としてドクシアディスが呼ばれてベトナムに来たようです。

山家 神奈川大学との関わりで言うと、一時期、長島孝一さんの奥さんの長島キャサリンさんに建築英語という科目を受け持っていたいたのです。その長島キャサリンさんが実はドクシアディスのお弟子さんで、当時、建築英語はドクシアディスカラーの授業をされていたというのを聞いています。

他にもお聞きになりたい方がいらっしゃるので、皆さん、質問などがありましたら、お願いいたします。

重村 では、一ついいですか。どこかすごく小さい地区にスポットを当てた話になるのかなと思っていたら、非常に大きな話だったので、僕が想像していたのとは違ったけれども、すごく面白かったです。アジアの1000年くらいの歴史と、ベトナムのかつてのトンキン、アンナン、コーチナという地方がどのように現代のベトナム共和国になってきたのかということも面白かったです。それからホーチミン市、サイゴンがどのような構造的な問題を持っていて、それらとこの200~300年ずっと格闘してきて、今も失敗し続けているというのに、失敗の提案が出続けているということもすごく面白いと思います。

今議論になっているトゥーティエムですが、これはもしまだ計画が決まっていないのであれば、まだまだ考える余地がたくさんあると思います。例えば江戸は17世紀に明暦の大火というのがあって、わっと燃えてしまったときに、これではいけないといって隅田川から向こう側の超低温地帯、今のゼロメートル地帯である本所深川を開発して発展するのです。だから一番最初は両国橋ぐらいしかつくれなくて、だんだん橋が増えていくのだけれども、本所深川の開発は、結局水がべちゃべちゃのところだから、水路を縦横にいっぱい入れて、水をそこに集めて、それで水でないところはしっかりと土地になるよという感じで作っていくわけです。

以前にレクチャーをしてもらったタードサック先生に連れられてバンコクに行くと、バンコクの周りもそのような開発がされているのです。今失敗しているのは、江戸もバンコクもよく似ているのですが、大事だった水路をどんどんなくしてしまうので、問題が起きているわけです。東京は最近分かってきたので、もう水路を埋めたりはしていませんが、僕たちが学生時代の頃はどんどん埋めていました。

僕が思うに、ドクシアディスがすごいのは、生活やそういうことから組み立てているところもすごいけれど、やはり湖をたくさんつくて、陸地になるところと遊水地みたいになるところを分けてしまおう

という考え方です。金もうけと一緒に考えるのであれば、水辺をたくさんつくって、マングローブなんかをはびこらせて、災害でないときは観光地になるような計画をします。例えばシンガポールは元々湿地だったわけですが、上手に計画しています。シンガポール唯一の世界遺産は植物園ですが、植物園を観光の売りにしたり、そのようなものをたくさん水辺につくっています。

ドキシアデイスの計画は低密度すぎるけれど、ササキ・アソシエイツの計画は高層ビルの並び方があまり魅力的ではありません。だからもう少し面白いやり方があるのではないかと、可能性があるのではないかと、僕ならそのような金もうけともつじつまを合わせられるし、ベトナムの生活との関係も提案できるのではないかと思います。

もう一つ言うと、ベトナムにいる人にこんな政治的なことを言っているのか分かりませんが、共産主義だからコミュニティが駄目なのではなくて、中国も含めて共産主義者が政治的に独占をして、国が進める資本主義をどんどん進めているわけですね。けれども、おおもとの共産主義者の人たちは、もとはコミュニティ重視だと思います。というのは、僕が行っていた頃の中国は、ものすごくコミュニティが強かったです。地区ごとに居民委員会というのがあって、ごみを捨てるな、つばを吐くなとしょっちゅう怒鳴っている赤い腕章をしたおじさんがいて、コミュニティはすごく強かったです。

だから今北京に行くと、銭ゲバ亡者ようになって良くないのだけれど、元々は中国人も共産党もコミュニティ寄りではないかと思えます。共産党主導の資本主義の中で、うまくコミュニティの良さを生かしていくと、例えば犯罪が減るとか、災害的に安全であるとか、行政需要がもう少し減るといふ見方があるのではないかと思います。

それからもう一つだけ言うと、アメリカ寄りだからコミュニティ軽視というけれど、アメリカは既に古いアメリカ的都市計画が嫌になっていて、今はニューアーバニズム^{※3}をやっています。ニューアーバニズムでは、歴史的なものも残さなければいけないし、歩ける範囲のコミュニティをすごく大事にします。村落やヨーロッパのまちにあるような、歩いて行ける範囲での人間的なつながりを残しながら開発したほうが、商業的な価値も上がるという考えなのです。その代わり、一個一個がゲートで区切られているゲーテッドコミュニティ^{※4}の問題があるのですが、でも少なくとも今のベトナムが真似すべきなのはそちらですね。

※3 1980年代後半から90年代にかけて、主に北米で発生した都市設計の動き。車に依存したまちづくりから脱却し、伝統的様式の再定義が試みられている。新都市主義ともいう。ヨーロッパではコンパクトシティ、イギリスではアーバンビレッジが同様の概念を打ち立てている。
 ※4 住宅地を外部からアクセスできないようにフェンスなどで囲み、コミュニティの居住者および許された人しか出入りできないようにゲートで制限する仕組みのコミュニティ。出入りを制限することで通過交通の流入を防ぎ、防犯性を向上させたまちづくりの手法。

李 アメリカの場合は、結局エッジシティ^{※5}が問題で、完全に独立しているニュータウンをつくってヴァンダリズム^{※6}がはやりたりして、その影響で今重村先生がおっしゃったように、ニューアーバニズムの

ウォーカビリティ^{※7}とか、いろいろなコミュニティに関係するものをつくってきました。それならいいのですが、今ベトナムは完全にエッジシティとしてのニュータウンをつくっています。これはまちから全く出なくていい、その地区内で職住は全て解決できてしまうという、1970年代に出てきた概念です。問題は犯罪やヴァンダリズムがはやったため、結局アメリカはそれで失敗したわけですね。そのときに、市外に出ないのでモビリティのガソリンが節約できるとか、そうした利点があったのですが、それはアメリカ人も間違っていたということで、ニューアーバニズムに走ることになります。例えばニューアーバニズムのウォーカビリティを考えた場合、歩いて行ける距離は25分圏内ぐらいですかね。ベトナムで都市開発のプロジェクトがあって、人民委員会の首長との会議に出たとき、アメリカの都市計画はどうかと聞かれることがあって、以上の話をすると、あまり反応はありませんでした。

それと、先ほどのコミュニティの話ですが、中国での重村先生の経験というのは、やはり共産党員が仕切る強制的なものなのです。日本のような、自発的に一般住民がリードするコミュニティとは異なるものです。

※5 大都市の郊外に建設された、オフィスや商業施設などの独立した都市機能を有する都市。
 ※6 故意に他人の所有物を破壊、損傷させたり、落書きする行為のこと。
 ※7 「歩く=walk」と「できる=able」を組み合わせた「歩くことができる、歩きやすい」という意味の形容詞“walkable”の名詞形で、地域環境の歩きやすさを表す概念。深刻な肥満問題を抱える欧米諸国において、住民の健康維持・向上のために環境面から働きかけようという取り組みのひとつとして生まれた。

重村 そうですね。

李 ベトナムも共産党員がリードするコミュニティはあります。もちろん今回のコロナ禍の場合は、ああだ、こうだと言って、家を周りながらいろいろな説教したり、ロックダウンのときに住民に支援物資を配るなどの若い共産党員はいましたが、そういうものではなくて、日本でいう自然な近隣付き合いです。それがいいのではないかと、ここに来て少し違和感がありました。

それともう一つ、先ほどのトゥーティエムのお話ですが、これからもやりようがあるかと思うのです。トゥーティエムでドキシアデイスやWBEが失敗した理由は、結局それらの案では商売にならないというところで、みんな失敗しているわけですね。ドキシアデイスの案は、低い湿地の地盤と、中心市街地との移動の便利さという交通インフラの技術的問題が実現に至っていない要因でした。先ほどの重村先生の提案が、こちらのデベロッパーたちに通じれば、素晴らしいまちができるのではないかと期待もあるのです。サイゴン川からの浸水の問題は、トゥーティエムだけの問題ではなく、サイゴン川に接している他の地区も同じです。かつてのサイゴンは、運河がベンタイン市場と市庁舎につながり、船が入ってきていたのですが、すべて埋められてしまったのです。今では街中で運河を見ることはできません。

しかし、向こう側のトゥーティエムはまだ沼地なので、今でも船が入ってくると河川があふれて浸水してしまいます。これを、先ほど重村先生の話にあった観光に持っていくのは可能性があるのではないかと思います。そのためにチームをつくって、神奈川大学とホーチミン建築大学で共同研究をしてもいいかもしれませんね。

重村 いいですね。水があれば、暑さの解消にもなるでしょう。例えばドライミストを噴霧しているストリートがあれば、そこは夏に歩いても気持ちがいいと。もちろん緑がいっぱいあって、その水のもとはあるわけです。だからエコにもなる、都市環境の改善にもなって、観光にもなって、銭もうけにもなる。街の半分ぐらいは水と緑にして、それでコミュニティ重視の住宅をつくっていくと、防犯にもいいし、災害とか福祉とか、いろいろなことにプラスになります。それを僕らも応援するけれども、李先生に頑張ってもらいたいです。

李 頑張ります。何か一つつくりたいと思っています。

山家 重村先生、李先生、ありがとうございます。かなり時間も過ぎてきていますが、他にご質問などはありますか。

柏原 東京大学の柏原と申します。私はハノイのほうをすごく頑張って研究していたのですが、サイゴンのほうは2回くらいしか行ったことがなくて、今日はハノイと比べながら、大変興味深く聞かせていただきました。

2つほど伺いたいことがあるのですが、まず一つ目がフランス人がやっていた都市計画のことです。ハノイでは現地人街とは分けて、「現地人地区」「フランス人地区」というかたちで計画が進められていましたが、ホーチミンのほうは結構中心部で道路が引かれていたなというのがすごく印象的で、それが現地人街とは特に分けてではなく、一気に計画されてしまったのかということをお伺いしたいです。

二つ目はトゥーティエム新都市のほうについてです。今みんなが建物を勝手につくっているというお話でしたが、2012年に日建設計が中心部の詳細計画をつくられたときのお話を伺う機会がありました。そのときにベトナムの都市計画では、基本的に指定容積率が街区の平均で規定されているのがデフォルトだという話を伺って、日建設計で計画したときには、それをきちんとコントロールしやすくするように、敷地ごとに指定容積を決めていったところが新しかったという話を伺いました。それが地元建築局の方にも、これをベースとして、容積率が決まっているのだからというので、交渉の余地が入りにくくなり、やりやすくなったというのが反応としてあったそうです。トゥーティエムの新しくつくるところでは、その学びが特に生かされていないというか、新しくするところだからこそ線が引きやすい、決

めやすいのではないかと考えていたのですが、指定容積や規制がどのようになっているのかということをお伺いしたいです。よろしくお願いします。

李 ありがとうございます。1番目の質問ですが、サイゴンも一緒に、フランス人が計画した都市の中心市街地の1区はフランス人が居住し、ベトナム人は他のところにみんな追いやられているのです。それが当時の都市プランナーが今もすごく批判されている理由の一つです。そこでかなり差別が起こっていて、今のトゥーティエムのもっと向こうのほうに原住民を追いやってしまい、最初はフランス人と、5区にチャイナタウンがあるのでお金持ちの華僑が、フランス人が計画した都市の中に住んでいたと思います。

柏原 元々の現地人街をそのまま残したのではなくて、別のところに行ってもらったということだったんですね。

李 そうですね。フランス人が住んでいた地域の周り、例えば今の7区やビンタイン区などにベトナムの現地人が住んでいたようです。実際、フランス植民地時代に開発されたところは1区の3平方kmで、その他の地域への拡張は行われていなかったようです。コフィンの50万人都市までは至らず、1区をより細かく整備することしかできなかったようです。そして、この地域とチョロンの間は水田やアヒルを飼う池がほとんどで、浅い運河が通っていました。

2番目の質問ですが、これは答えになるかどうか分かりませんが、ベトナムでは土地はすべて国、政府のもので、ある都市や地域を開発するとしたら、都市計画のピクピクチャーとなるマスタープランをつくるのが法律で決まっています。マスタープランはトゥーティエムのように世界の有名なプランナーを招待するか、コンペで選ぶことが一般的です。それは開発面積の大きさや土地が位置する市の人民委員会の許可のもとで公布され、デベロッパーが国から土地を購入し、開発が可能となります。ですから、トゥーティエムが危ないのは、ササキ・アソシエイツが全体のマスタープランをつくったら、市はそれを公布して、あとはデベロッパーが土地分割をして、みんな勝手に売りつけるわけです。そうするとデベロッパーは払い下げというか、政府からその土地を買って、彼らは自由がままに開発をしたらそれで終わりなのです。その辺りは、日本の都市開発とは少し違うところがあるかもしれません。

全体の土地利用図はありますが、それがどのようになっていくのかという予想が全くつかないマスタープランになった場合、全体のまとまったアイデアや理念がそこで全部消えてしまい、全く別のニュータウンができてしまうこともあり得ます。誰もコントロールできずに、ただなすがままの都市になっていきます。それをどうしたらいいのかと

いうのを、今いろいろな人と話をしていますが、答えがなかなか見つからないところです。

柏原 ありがとうございます。そのような状況だというのが想像できていなかったの、勉強になりました。

ハノイもマスタープランは外国の企業がつくっていましたが、詳細な実現のプロセスはフォローできていませんでした。

李 全て同じだと思います。今はササキ・アソシエイツがベトナムのいろいろな中小都市のマスタープランをつくっていると聞いています。私はニャチャンにリゾートホテルやヴィラを設計していますが、そこも全体のピックピクチャーはないので、デベロッパーが困っていました。しかし今は同じようなかたちで、ニャチャン市のピックピクチャーが描かれて、それを市がデベロッパーに公布したら、いわゆる土地利用だけなのですが、それに従って勝手に開発をしていくという構図になっています。

重村 今議論をしている問題は、少し話のスケールが違うかもしれませんが、アメリカの都市計画でも民間企業が先行して絵を描いて、弱い自治体がそれを追認するようなかたちになり、絵を発注したところが結局もうかるという、地方都市の腐敗の一つの典型的な構図としてあります。そして映画や小説の舞台になったりするわけです。

それと似たようなこととして、1970年代の初めにドイツが「ベバングスプラン (Bebauungsplan)^{※8}」を始めます。このBプランをつくるのは、ものすごく大変です。都市計画や建築のこのみならず、建築経済も分からなくてははいけません。だから自治体にしてみれば、ここはまだBプランが描けていないところを、私が描きますという会社が出てきて描いて、オーソライズしてしまいます。ところが、もう一個上位のFプラン^{※9}との整合性や、個人が得をしているのではないかという問題も生じているというトラブルを、70年代から80年代にかけてのドイツで聞きました。

だから、多かれ少なかれ似たようなことはありますが、ベトナムもこのようなことをやり始めた最初の時期なので、いろいろなことが起きているのだらうと思います。でも徐々に解決をするのではないかと思います。

※8 地区詳細計画。複数街区程度の比較的狭い面積にこのBプランが設定される。建物の建設にかかる詳細な取り決めが図面的に表現されている。ドイツにおいては、計画が設定されていないところでの開発は認められないため、Bプランがあるところで初めて開発が可能となる。
 ※9 ドイツ語のFlächennutzungsplanで、土地利用計画を意味する。日本の市町村が策定するマスタープランに該当するが、ドイツでは市町村全域が都市計画区域に該当し、Fプランが最高位の計画となっている。

李 アメリカの場合は、PI^{※10}とか開発の方向性を決めるために、矛盾がないようにすり合わせをします。でもベトナムではそういうものがないので、デベロッパーの主導で全てが決まっていきます。そうい

う状況の中では、理解力のある良いデベロッパーにめぐりあって、自分が思っているようなものをつくっていくしかないかと思っています。しかし、そのような出会いはなかなか難しいですね。

山家 今チャットのほうで、中井先生が「日本の再開発事業も同じような気がします」とお書きになって、私も「開発したい方向に都市計画が変わりますから」と書きました。

この辺りの話をするとなかなか止まらないところもあるかもしれませんが、そろそろお時間になりましたので、これで公開講演会を締めさせていただきます。李先生、ありがとうございました。

※10 パブリック・インボルブメント (Public Involvement) の略称。公共事業などの計画に、住民の意見を反映させるための手法。事業の計画や実施などの過程で、関係する利用者や住民に対して情報を公開し、広く意見を聞き、その意見を反映させること。ヒアリングやアンケート、ワークショップなどで住民の意見を聞くことで、行政と住民、地域同士の利害対立を抑制する働きがある。